

果に提へられたる考へにして妥當を缺き、龜版、獸骨文の展示する世界は本圖版の總體が語る如く、はるかに進んだ古銅器の文化段階にあるべき事を述べられて居る。尤もそれらは等しく古銅器の文化と言ふも、殷墟物はそれ自身として著しい通性を示すものであつて、先に『戰國式銅器の研究』或は『金村古墓聚英』等によつて明かにされた古銅器文化の様態と顯著な對比をなし、そこに安陽物の著しい性格が考へられる事は本書を繙く人の直ちに看取する所であらう。而して支那古銅器惹いて古代文化の研究も、こゝにはるかに上限に遡つた基點を得る事となつて、將來新たなる進展を見るべき事が期待されるのである。(昭和十五年十月、京都小林寫眞製版印刷所發行、定價金貳拾五圓)(岡田芳三郎)

西藏文蒙古喇嘛教史

橋本光實編

蒙古喇嘛教史

ジクメ・ナムカ著
外務省調査部譯

前者は西藏原文の校刊本であり、後者はその譯注本であり、共に橋本光實師の手に出でたるものである。原文並びにその獨逸譯本は早く半世紀も以前に出版され、廣く東洋學界に傳播され裨益を與ふる事甚だ大であつたが、既に稀觀文獻に屬するので、こゝに此の出版を見るに至つたのは誠に感謝に値ひすべきことと云はねばならない。殊に獨逸譯が唯一の譯本であつたのを我が國語に

原文から譯出されたのは誇つていゝと思はれる。

ジクメ・ナムカの傳記、及び本書述作の緣起は本書末尾に記載されてゐるが、それが唯一である。ベリオは彼を蒙古人と見た(Cf. *Journal Asiatique*, XI^e Serie, Tome I, p. 656.)が、ラウフェルは西藏人である(Cf. *Toung Pao*, Vol. XIV, p. 585, note)した。橋本師も「西藏人ならん」と云はれるが、先づそれが穩當だらう。彼の著作は刊本になつてゐるんだが、何處の刻か分らない。ワシリエフは東蒙古に出たと云ふ(Cf. *Mélanges Asiatiques*, St.-Petersbourg, Tome I, p. 414.)丈である。この刊本も稀觀と見えて多く世に傳はらず、殆んど皆フット校刊本を利用してゐる。

本書は早くロシアに送られてゐたが、ワシリエフが送つた本により、シイフェルがその注意すべき資料たるを紹介して(Cf. Bericht über die neueste Buchensendung aus Peking, von Anton Schiefner, *Mélanges Asiatiques*, Tome I, p. 405, p. 414, p. 422-)から、世に知らるゝに至つた。ワシリエフは又露都のみでなくカザン大學には刊本の外に著者原稿本の移寫本だが少し異同の有るものと報告(Cf. Die auf den Buddhismus bezüglichen Werke der Universitäts-Bibliothek zu Kasan, vom Prof. Wasiljew, *Mélanges Asiatiques*, Tome II, p. 363.)因に「フットは彼の獨譯本の序拾頁に之を引いて亜細亞雜誌第一卷としてゐるが第二卷の誤植である」としてゐる。流石にロシアには珍本がある。シイフェルは本書を出版せん

と企圖してゐたと見えて移鈔本を作つたりしてゐるが、その遺業はフウトによつて完成せられたのである。

フウトは平凡社東洋歴史大辭典にも極めて簡單なる傳が出てゐるが、印刷が悪くて主著とし擧げられたる二書も三書と誤解せられさうである。通報第七卷七〇二頁以下に出てゐる弔傳はラウフェルの筆になり、其の全貌を盡すに足るものである。酒杯を共にせられた事のある我が渡邊海旭師は「歐米の佛教」二〇五頁に於て故友を偲んで居られるが、「明治三十九年四十九歳で早世した人」と書いてゐるのは、是れは誤算と云ふより誤植であらう。フウトの遺著は大牛西藏學であつたが、その西藏語學は自習に基くと云ふのであるから、凡庸の企及し得る所ではない。彼は本書の西藏原文を一八九二年の夏に校刊したが、其際已に譯了し終へてゐたと見え、獨逸譯本の近刊を豫告してゐた。然るに彼の學術的良心は之を續刊するを許さず、幾多の本書に大小關係のある論著を發表したる後、補訂を経たる譯注本を一八九六年に至り公刊したのであつた。然も考證・索引・校記は之を第三卷に編して本書を完成せざるを得なくなつた。この待望の第三卷の完成を見ずして早世したのであつた。

注は此種出刊の模範と見做され、ラウフェルは筆を極めて賞讃してゐる。事實其後の蒙古西藏の佛教史を考ふる者安んじて此書に據らざるものはなかつた。

フウト本の出版は上に記した如く、第一卷原文は一八九二年であり、第二卷譯註本は一八九六年であり、これは原本の詳題刊記並びに序文に徴して誤りない。然るに上引の渡邊海旭師の「歐米の佛教」にも、東洋歴史大辭典第七卷三四頁下段にも、又ラウフェルの通報に於ける弔傳注にも、ベリオの「西藏十支考」(Cf. Journal Asiatique, Mai-Juin, 1913, p. 655.) にも第一卷を一八九三年としてゐるのはどう云ふものであらう。單なる誤植であるのか、或は刊記は一八九二年でも出刊遅れたる記憶でもあつた爲めであらうか。余としては原本刊記に徴して三は二の誤とするより外はない。前内博士の蒙古史研究外篇元史研究資料並に參考書目略一〇九頁、及び東洋歴史大辭典第四卷一一九頁上段には引いて只「一八九三—四年」としてゐる。第二卷譯注本の「一八九六年」は諸書の著録に異同はない。果して然らば此處も一八九二—六年と訂正せなければならぬ。

橋本師の兩著は専ら此書に據られ、譯述は西藏文から直接に翻譯せられ校定せられたのであるから、我等にとつては此上もない幸福である。フウトの譯文は如何にラウフェルの云ふ如く精密にして明暢であつても、我等にとつては語法の異同から起る了解難を如何ともし難い。又かのフウトの採つた諸字の精確なる羅馬字譯が屢々讀書の眼を眩まして了解を碍けるのである。我等として

は橋本師の邦譯によつて此等の難から免れ得たのみならず、之を西藏原文に参照するに於ても非常なる便宜を得る事となつたのである。我等は努力多き此の兩著の出版に對して滿腔の尊敬を拂ふに吝かではない。

余は譯文に對して批評し得る資格のあるものでない。又且つ原本に沈潜考證した事もなく、たゞ必要なる時に二三の箇所を参照したるに過ぎないから、注釋を云爲する資格もない。随つてこの新刊兩書を批評を爲し得るものではない。たゞ本書を得たる喜びにまぎれて瀏覽の際に氣付いた一二をこゝに述ぶるを許された。

原文本の凡例に「フット本の明らかなる誤植と思はれた語は之を訂正した、又、大體はフット本に依つたが、より正しと思はれた場合にはシーフナー手抄本にも依つた」とあるが、これは面倒でも訂正表を編して添附して貰つたら便利であると思ふ。凡帳面なフウトも之を喜んだであらう。

索引として語彙と諸表があるが誠に便益を與へる。フウト本第三卷未刊の闕を補ふに足るものである。もつと詳細でもよかつたと思ふ。

譯注本の外務省調査部序に三種の歐人の著が引いてある。ポポフの著は石川氏譯本が擧げてある。余は原本を知らないが、この譯本は餘りよい出来でない。江實君が蒙古源流の譯注にこの本を参照したのは失敗だつたと自分は思つてゐる。次にケッペンとワッデルを擧げたのはいいが、並びに復刊本の刊記らしいのは面白

い。學界の高き評價を受けてゐるかなればこそ復刊本が出たのだが、或は稀覯本の事だから得易い景印本があるぞとの老婆心かも知れない。然らば感謝していい。

解題で本書の引用書を擧げられたのは便利であるが、盛んに引用されたる薩迦班禪の「妙嚴寶藏論」・即ち本書一三七頁に出る「善說寶藏」を脱してゐる。引用されたる箇所に關してはフウト譯注本卷首に對照出典表もあるのだから、有名なる「善說寶藏」は記入して置いてほしかつた。

凡例に於て「フットは干支に西紀を充てるに、必ず一年の差を以て後れてゐるが、本書は之を訂正した」とある。歐米の西藏學者が西藏干支に西紀を充て誤る原因に關してはペリオの「西藏干支考」に於て論じ盡くされた。(The cycle sescagénaire dans la chronologie tibétaine, par P. Pelliot. Journal Asiatique, mai-juin 1913, p. 633-667.) 彼はフウトの蒙古佛教史の紀年是一年を加ふべきものと斷じてゐる。この論文に於て誤謬を指摘された一人ラウフェルは虚心坦白にこの論證を承認して補箋 (The Application of the Tibetan Sexagenary Cycle. Tsung Pao, Vol. XIV, p. 569-596. The Sexagenary Cycle Once More. Ibidem, Vol. XV, p. 278-9.) を書いた。ペリオの干支考は歐米西藏學界に於ける劃期的の考證であつた。本書の如くフウトを参照しながら之に惑はされず訂正されたるは、固り其處であるが我等は誇らしく感ずるのである。

略號の所でアルタン・トプチは外務省版を参照せられたるを示

された。外務省版に不満足なる事は余は嘗て指摘した事がある。随つて一八頁註(3)に於て Dowra を Din と讀む事が起るのである。

三三頁にミニヤグが出てくるが、ミニヤグは河西又は西夏に當る言葉である。後にも出てくる語である。又ミニヤグとも云ふ。

一二二頁、スムバ・ハンボの印度西藏佛教史はサラット・チャンドラ・ダスの校刊本カルカッタにて出版せられた。蒙古佛教史の部續刊せられる由を豫告してあつたが終に出でなかつた。

二五九頁、白頭を回教徒？とするは當らない様に思はれる。かの有名なる入藏宣教師が白頭のイッポリト・デジデリと自稱する所を以て見れば回教徒でない。必はカシユミイル人を白頭と呼ぶんではないかとも思ふが余には詳かでない。

二九七頁、「正字學源泉」と明かに書名になつてゐるのは喜ばしい。余は嘗てフウト譯の此處を改譯せねばならない事を指摘した事があるからである。此書は現存して居り、シベリア地方で景印刊行されもした。蒙文名を「メルゲット・ガルフ・イン・オロン」と云ふ。

四二七頁、蒙古源流の原名は矢張り余は賛成し難い。江實氏の譯注を見よ。余はフウトの改譯に大體賛成して四種の書の略名を合併したものと見たいが、まだ定まらない。

以上單なる思ひ付きを書いて、詳かなる論證を抄出しなかつたのは失禮であるが、何れ又モット研究して定まれば詳論する機があらうと思ふ。こゝではさう必要もなからうと失禮した。(西藏文

蒙古喇嘛教史、昭和十五年十一月、蒙藏典籍刊行會發行、菊判四〇八頁、定價七圓、蒙古喇嘛教史、昭和十五年十二月、生活社發行、菊判四三〇頁、定價四圓五〇錢)〔石濱純太郎〕

Hubbard, L. E.: The economics of Soviet agriculture. London, Macmillan, 1939.

社會主義の國ソ聯邦。世界情勢轉回の嵐の中に立つて、東亞大陸政策を論じ南進日本の行手を凝視する時に、ソ聯邦は何と言つても大きな存在である。今やソ聯邦の研究は特に興味深いとも言ひうるであらう。併し、ソヴィエト共產主義社會の檢討に際して目覺しい都市工業の發展に眼をくらばれ、農村に動きつゝある情勢を見落すならば、ソ聯人民生活の理解は不完全を免れない。

近時の華々しい工業建設の反面に於て、ロシア人口の七〇パーセントは農民であつて、ソ聯邦は依然として農業國の名に恥じない。而も最近に於けるソ聯國力の急速な進展は、一九一七年の革命以來十數年の間、革命政府が實質的に握り得なかつた國內の全資源を、漸く確保することに成功した結果である。革命當初に於てボルシェヴィツクは實に對農村政策に失敗したのであり、爾來流石のソ聯政府も農民を向ふにまわして手を焼いて來たのであつた。

さて、本書の記述はロシアに於ける農奴の起原から始められてゐる。既に十七世紀の半頃には確實在となつてゐたロシアの農奴は、一八六一年の解放令によつて自由の身となつた。その後